
彼女は彼で 男or女

湯クン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女は彼で 男or女

【Nコード】

N6406V

【作者名】

湯クン

【あらすじ】

彼女は一人、狩りを続けていた。彼女は一人、街から街へと旅を続けていた。そんな彼女達二人は出会った。砂漠の街【ロックラック】で。彼女は見惚れた。彼に彼女は見惚れてしまった。そして、工房で働く彼女も彼女に出会い、彼女は彼に惚れてしまった。彼女は彼であって、彼は彼女ではない。ただ、ある依頼を受けた一人のハンターはそれを『狩る』為に【ロックラック】へと流れ着いたという、ただそれだけの事であってそれ以上は彼には分からない。

凄まじい勢いで自身の頭部で地面を削るかのようにして突進してくるソレを回避する為に、彼女はグチャリと足場の悪い泥水の溜まり場に向かって大きく体を放り投げた。

まだ地に着いていない空中を浮遊しているその時、背後から何かを通り過ぎた気配と風が吹いたかと思えば直後に重低音なモンスターの唸り声が微かに聞こえた。

泥沼に勢い良くダイブした後、彼女はすぐに顔を上げて後ろを振り向いて確認をした。

(よしっ！)

内心でガッツポーズを決めはするもののすぐに起き上がり防具の中にまで、それこそ生地にまでグツシヨリと泥水に濡れた事などにせず、地面に半身を埋めた岩のような 若干の赤みの帯びた 甲殻を持つ、頭部のゴツゴツとした頭殻が特徴的なモンスターへと一気に駆ける。

先に用意していた落とし穴に自分を劣りとした作戦に見事言葉通りに填まってくれた、獣竜種に属する『土砂竜ボルボロス』。

彼女は落とし穴で身動きがとれず、必死に上半身をもがいて脱出を心みるボルボロスに向かって一つ、二つと連続して素材玉と捕獲用麻醉薬を調合して作ってきた捕獲用麻醉玉をボルボロスの頭部へと投げつける。

ボルボロスの頭部に直撃した捕獲用麻醉玉は、衝撃で弾けると何やらソレらしい煙を発すると同時に先程まで見境のないまでに落とし穴の中で暴れ狂っていたボルボロスを一瞬にして深い深い眠りへとつかせた。

彼女は、麻醉によって体の自由を奪われ、意識すらもない状態のボルボロスへ静かにゆっくりと近づいていく。

額から汗がジワリと流れ、先程までのこの強大な力を有する相手との戦闘時とはまた別の緊張感のままに捕獲用麻醉玉で確実に眠ったとはいえ突然動きだすかもしれない目の前のボルボロスへと一歩、また一歩と足を踏み出す。

彼女は、ボルボロスとの距離が一メートルとまで来たところでゴクリと唾を飲み込んだのは、そーっと顔を覗くようにして本当に眠っているのかを確認した。

『ググググウウ……………』

「ひっ……………!？」

『ググググウウ……………』

「……………」

ボルボロスの寝息に思わず裏返った声が出てしまった。ちよつとした事では目覚めないと分かっていたながらも、とっさに口を手で押さえ込んで周囲に他の脅威となりえるモンスターがいないか再度確認。

周囲にはジャギイなどの小型の凶暴なモンスターもいなければ至って危険度が少ない温厚な草食モンスターのアプトノスすら見当たらない。

ホツと胸を撫で下ろしては、彼女　ミナ　は視線の先に入ってきた先程盛大に飛び込んだ泥沼に浮かぶ自分の姿を見つけた。

自分の身を守ってくれる、白色を基準とした氷牙竜の甲殻を主に

用いて作られた防具　ベリオシリーズ　は、元の色の純白から泥の乾いた土器色へと変色し、ベリオキャップの塞いでいない顔半分の肌も泥まみれで女性としては少しどうかと思うような格好ではあった。

彼女が自分自身を自慢できる数少ない一つである、後頭部で縛った長い白髪も今は泥水を吸収して汚れきっており、後々の手入れがかなり大変そうなものだった。

だがこれは狩りだ。最終的にどれだけ汚れてようが、それは仕方がない。様々な場所にモンスターは生息する。それを追いかけて、人も大自然へと踏み出すのだから。

ミナもそんな事は分かっている。少しまだ濡れている防具の内側や生地には慣れないものの、別に乾いた泥に、まみれた自分の格好の事などどうでもいい。

「ううう……やった。やった……やったんだよ私っ！」

今は押さえ込んでいた嬉しさ、喜びなど、大型モンスター狩猟の成功への十分すぎるまでの達成感を一気に爆発させるようにしては、先程までビクビクと警戒していたボルボロス相手にすぐ隣で大きく体を跳ねては、今回の土砂竜ボルボロスの狩猟を『たった一人』でついに成功した事を自分に言い聞かせるようにして確かめた。

「はあ……」

ギルド側に捕獲したボルボロスを預け、ようやくミナ自身がハンターとして身を置く砂漠の街【ロックラック】へと帰ってこれた。

とはいっても、正直ミナにとってはこの街で居る事よりも一人で

狩りに出かけていた所ではあった。

『街』と呼ばれるのだから、村とは違って人の人数はかなり違う。ましてや、元々住んでいたミナの故郷の極寒の地の中にある小さな村と比べると何十倍どころではない数の人だ。

正直、ミナはこの街に来てもう一年が経とうとしているのだが、今だに村の人達とは違って活気溢れるというかなんというか……とにかく、このロックラックという街に居る人達のテンションには今だについていけそうにない感じた。

それも自分の引っ込み思案で、人見知りの激しい性格のせいというのもある事は分かってはいるのだがやはりこればかりはどうしようもないのが現状。

大声で喋りながら上がっていく、厳つい武具を身に着けたこれから狩りに向かうであろう数人のハンターの隣を肩を竦めながら、石段を降りていくミナ。

石段を降りてすぐ、壁もなければ天上もない石畳の上にテーブル等が置かれているだけの広場と酒場とが一緒になったそこには、若い者から年配のハンターまで今日も飽きずに飲んで騒いでを繰り返していた。

屋外とはいえ、数十人もハンター達が一斉にこれだけ居れば周囲は熱気に包まれ、酒臭い匂いが広がり、頭痛がしてくる程に話声は大きくあちこちから聞こえてくるので、それだけで体力が無くなっていく。

ミナはとつとと用事を済ませて、部屋に戻ろうとそそくさとギルドカウンターの方へと足を運ぶ。

「あの……ボルボロスの狩猟なんですが……」

「ミナ！貴方、さつきギルドの方から連絡あったわよ。ついにボルボロスの討伐に成功したのね！」

「あ、え……あ、はい」

「やったじゃないミナ！」
「捕獲……ですけど……」

自分とは違って、大きくその豊満な胸を張って元気良くシャキシヤキとそう言ってきた彼女は受付嬢の一人、リンダ。

黒髪のシヨートが似合うかなりの美女で、赤の制服に袖を通すミナがこの街で少しは会話のできる人物の一人。肩をポンポンと優しい笑顔で叩いてくる彼女に、少し照れたように視線を下に向けて頬を染めるミナ。

「あ、これ報酬金と、素材ね」

「え……こ、こんなに貰っちゃっていいんですか!？」

「いいのよ。ミナは一人で依頼を達成したから、むしろ当然よ」

「あ……ありがとうございます!」

突然、今までの報酬金よりも多い額でミナはそれが本当に自分が貰ってもいいお金なのか戸惑ってしまった。

しかしリンダの言うとおり、大抵のハンターは大型モンスターの狩猟に出かける時は効率よく狩りを進めるなどの理由から仲間と共に行く。そうになると、必然的にその依頼の報酬金はそれぞれに分けられるからして、そう多くはない金額。それでも大型モンスターならば、元の金額は多いものだ。個人でも貰える時はかなり貰える。

それを、ミナは一人で全ての金額を手に出れるのだ。一人という孤独で危険な狩りを達成した小さな見返りの一つである。

大声で、報酬を手渡しただけの自分に礼を言って、報酬の素材よりも報酬金の入った小袋を見て碧の瞳をキラキラと輝かすミナに対して「ウフフ」と愛らしい、男を一発で虜にしまいそうな笑みを再び浮かべるリンダ。

「それにしても、本当にボルボロスを一人で討伐しちゃうなんてね

「。初めて会った頃の時には想像もなかったわよ。でも、やったのよねーこの子は」

リンダは、ツンツとミナの額を人差し指で小突く。ミナも、そんな気軽に接する事のできるリンダとのこういった事に少し嬉しく思い、頬を緩める。

「で、でも……防具も武器も、義姉ちゃんのだし私一人の実力じゃないですよ」

「そんな事ないわよ。そりゃ武具は大事だけど、一番はやっぱり実力じゃない」

「そ、そんな……私なんてまだまだですよ。後、捕獲です」

報酬を抱えたまま、両手をモジモジとさせて謙遜してはいるものややはりリンダの言ってくれた事には嬉しさを感じているようでまた照れた様子を見せるミナ。そしてリンダ自身も、アイルーなどに感じる愛らしい小動物を見るような目でミナをのほほん見つめる。

だがリンダには、先程言ったミナの『一人』という言葉が少し引っ掛かっていた。いや、この事に関してはリンダはずっと思っていた事ではある。

「ねえ、ミナ。これからも一人でやってくの？」

「うっ……それは……」

「今回のボルボロス、一人でやったのはいいんだけどこの先はやっぱり厳しいんじゃない？」

「そ、そうなんです……」

別に今のままなら生活には困らない。実際、この一年もなんだかんだで乗り越えてこれた。

今までと同じように、キノコや生肉。たまにドスジャギイやロアルドロスといった、モンスターの相手ぐらいならギリギリなんとか一人でも出来る。

だけど、それじゃあわざわざ村から、決して自分にとって居心地の良いとはいえないこの街にまで出てきた意味がない。

ミナは、今以上のお金を求めている。もっと、それこそ一人一人を不自由なく養えるぐらいの大金を。

ミナは、七年前に両親を亡くした。それは、一匹のモンスターによって街から村へと移住する際の移動中に襲われたのが原因。ミナとその両親。そして道中の安全の為に一緒にさせてもらった一人のハンター。

運が悪かったとしかいいようがなかった。

大人一人以上もある脚だけで簡単に荷車を踏み潰し、荷車を引いていたアプトノスを強靱な顎で喰らいつくその黒く、巨大なモンスターの姿は微かにしか思いだせない。アプトノスを喰らい終わったソレは、道中を一緒にしていたハンターも含め四人の方へと向き直り、光る眼光をミナ達四人に向けては次の瞬間には盛大に飛びついて来た。

そこまでが十歳の時に起こった出来事。次に目を覚ました時には、両親は居ないで代わりに一緒に居たハンター。今の義姉。全てを聞かされた。そして、両親を見捨てた自分に責任をとらせてほしいとまだよく分からないままに言われ、そのまま本当に両親の代わりに義姉は、自分を育ててくれた。だが、彼女はハンター。

たった一度の狩りの失敗で下半身がまったく動かす事を出来なくなり、短いハンター人生の終わりを告げられた。

それが丁度一年前。

ハンターどころか、まともに働く事すら出来ない義姉の為にミナは自分自身が義姉の武具を引き継ぎ、ハンターとなってロックラックに身を置いてまで稼ぎに、小さな北にある肌寒い村から出てきた。その事から、今よりもっとお金が必要なミナにとって今まで通りの少しの仕送り程度では命を救ってくれた、無償で育ててくれた義姉を楽にさせる事なんてできない。

例え、血の繋がりがなかつと、他人であろうと、関係ない。ミナは、義姉の為に自分ができる事をしたいただけなのだ。

本当ならば更に上の依頼を受けたい。もっと難易度の高い依頼であれば、高額な報酬が手に入る。

だけれども自分の実力だけではこれ以上、上にはいけない。今までは、ベリオシリーズなんていう、今の自分では到底相手にできない氷牙竜ベリオロスの防具に、同じベリオロスの素材から作られた【ブリザードカノン】一式という義姉の武具でなんとか、クルペッコやロアルドロス。そして今回のボルボロスだって新人ながらたった一人で乗り越えてこられた。

『仲間』とならば、自分の力をもっと伸ばす事ができる。もっと上の依頼だって達成できる。

だけれども、この街の人々は苦手だ。義姉の為にそんな事を言ってもらえないのは分かっているが、分かっているのだけでも。

自分のこの消極的な性格が恨めしくて仕方がない。

「男の人はやっぱり……その、なんていうか怖いし」
「うんうん」

「お、女の方は少ないし……それに、見つけても女のハンターさん

はやっぱりもう既にどこかのパーティーに入ってたりで」

そこまで言った所で、ミナとリンダの二人の間に一人の酔いしれてフラフラとおぼつかない足取りをした男が割って入ってきた。

男は、根元は黒で毛先は茶色と、茶髪はたぶん染めたであろうその髪を短く刈り揃えては、ゴツゴツとした岩のような顔立ちをした二十台後半といったところ。

身に着けている防具は、男のたくましいガツチリとした体格を更に引き立たせるような肩から二本の巨大な角を生やしたのが特徴的な、黄朽葉色をしたディアブロGシリーズ。

角竜ディアブロス。ミナが戦えば即ヤツが持つ二本の角の餌食にされるだろう相手の素材で生産された防具。更に、Gと呼ばれるミナのような下位のハンターでは依頼を受ける事すら出来ないような上級クエスト……通常以上に一際手強いモンスターの依頼であるディアブロスを討伐してきた証。

「ういゝ……ひっく……」

「ひいひい!!」

男は顔を赤くして、目蓋も半開きのもう完全に酔ってますよと言わんばかりの状態で、体を支えるようにしてミナの怯える小さな肩に豪腕そうな太い腕を回す。

男の顔が間近に迫り、酒臭い臭いが更に臭さを増して鼻をついてくる。

今の状況に耐え切れる訳のないミナは、手に持っていた報酬の品など地面に落とす、悲鳴を上げて自分の体を抱くようにギュッと両手で強く抱きしめてはガクガクと怯える。

「ミナちゅわ〜ん、一人でボルボロス狩ったんだって〜?聞いてたよ〜、凄いな〜。よかつたらさ、俺と一緒に今度パーティーを」

「い、いいいい嫌ですっ!!」

「えー、いいじゃん。一回だけでいいからさ。俺、こつみえても結構な」

「うっ、あっ……いやあああ!!」

パーティーの誘いをしてくる男だが、そう言いながらもどさくさに紛れてベリオレジストの上からツーッと指先を背中から腰へとなぞる感触をミナはゾクっとしながらに感じ、より一層に悲鳴が高くなり大きくなる。

これだから男の人は苦手なの!と、心の中で叫ぶが、叫んだところでどうとなる訳でもない。

前にも、ここまで酷くはないものの、何度か言い寄られた事があった。どの人も皆自分はハンターで、パーティーに と誘われるが、どれも男性ばかり。

村には絶対的に自分と同じような気の弱い男の人達ばかりだった。そもそも、男の人ですらほんの数人程度。

男の人というのが、ロツクラツクの街に来て怖い存在だと気づいたのはハンター登録の為にこの広場に來た最初の頃。

互いに野太い怒声を浴びせあいながら、恐ろしいまでの それこそモンスターのような 様で本気の殴り合いをしているのを見てしまっただけだった。

村の男の人達も本当は怒ったらこんなにも怖いのだろうか……そんな事まで考えてしまう程に、自分の性格もあって男性は恐怖の対象という強い印象が残ってしまった。

その為、男の人皆が皆怖い人じゃないと分かっていたながらも、パーティーに誘われても後一步が踏み出せずに断ってばかりいた。

後ろ側の広場ではドンチャカと騒ぎ、ミナー人程度の悲鳴など誰一人として聞こえてはいても殆どが気になどしてしない。

だが、目の前で可愛い妹のような癒しの存在の嫌がるその光景を黙って見ているなどリンダには出来ない。

「アンタ！止めなよ、ミナが嫌がってんのが分からねえのか！」

「おお、怖い怖い。じゃあ代わりにリンダちゃんが〜」

「あー、うつとおしい！」

受付嬢としての優しい人柄とは別人のように、それこそ鬼のような形相でミナに触れていた手を自分に伸ばしてくるソレを荒々しくカウンターに叩き落す。

リンダもリンダで、その美しい容姿にスタイルもあってミナ以上にこういった性質の悪い野郎共を相手にしてきた。その分、ミナ以上にこういう輩の対処の方法は心得ている。

「ってーな。なんだよ、ちょっとぐらいいいじゃねえかよ！なあ？

ミナちゃん」

「コラ、またアンタは」

男が振られた左手を再びミナの肩へと戻そうとした瞬間に、男の空いている方の腕に何かがドスつとぶつかった。

それは、反対側で怯えきっていたミナにも見えた。

その人は、すぐに男から飛び退いた。格好が、鉄鉱石などを素材とした初心者ハンターの人を着ているのをよく見かけるチエーンシリーズのものである事から、例え初心者であろうと『ハンター』という事は分かった。

男は相手がハンターである事も多少関係してか、邪魔された事に少タイラつとした眼つきでぶつかって来た『人物』へと睨みをきかせた。

「あ〜……えと、あの………すみません」

ぶつかってきた人物は、深く頭を下げている、そう言うのはゆっくりと男の顔を窺うようにしながら頭を上げていった。

チエーンヘッドは装備していないようで、その容姿を確認するにはなんお手間もいらなかった。

絶世の美女。

ミナにとっては、リンダはお姉さんの存在で女性として憧れるような魅力があるが、今日の前の美女は言葉では表せない。

ただ単純に、綺麗な人。それが第一印象とでも言えばいいのだろうか。

整った顔立ちに、細い顎のライン。少しキリッとしたような、それでいて優しそうな目を持つ蒼の瞳。

髪はよく似合っている黒に、一本一本が細いリンダとはまた別のショートヘア。白い、しかしやはりハンター。少しやけた肌は、コレはコレでいい色をしている。

チエーンシリーズの上からでも分かるぐらいの引き締まった、それでいてどこかスレンダーな脚。胸はベストで分らないが、その腰付きは、官能的何かを女性であるミナですら感じてしまう。

身長はどうだろう？

目の前の、嫌な男よりも少し低い……百八十辺りで、自分よりも十五センチ以上は絶対に上だと判断できる。

とにかく、ミナにとっては同じ女性であるにしても見ているコッチが何故かドキリとしてしまう程だという事だった。

トウカは、砂の海が広がる中にポツンと自然にとつては小さく、しかし人にとつては大きく築かれた街である【ロツクラツク】の工房にて御婆おばにジツと見つめられていた。

御婆を挟んだ向こう側では、人以上の知識に技術を豊富に持った竜人族が数人。そしてその弟子のような竜人族の結構な高年齢層に比べて若い者達が数人汗水を垂らしながら武具の生産に励んでいた。中には、女性の姿が一人見えるがその類には炭の黒い後、他にも裸の男達のようにとまではいれないが熱気の中はやはりかなり暑いのだろう。

インナーを一枚着ているだけだ。あの人は、女性だという事を別段気にしないのだろうか？なんて、ただジツと今も見られ続けるだけの気まずく暇な時間を疑問によって潰してみたりする。

下は男もその女性も皆ズボンを穿いていた。

上はあんなに露出しきっているのに、何故下はあんなミツチリとした物を？なんて、またも疑問を考えもしたが、今度のはただの変体だと、誰に何を言われるでもないがどうも恥をかけた気分になった。

「ふーむ。難しいのお……」

「あ、だったら測ってもらってもいいので、それで」

「バアー力者。そんな事せず、わしゃぐらいになると服だろうが防具の上だろうが一発で分かるわ」

だったら、どうして十分近くもジツと自分の事を見てたんですかと、聞きたい気持ちもあるのだが、まアプロのプライドというのがあるのだろうと何も言わないでおいた。

「えーと、ちえーんしりーずだったかな？お前さんの品は」

「はいチエーンシリーズです。えと、サイズ合うのありますか？」

「179か……少しでかいけれど、確かこの辺りに」

少しでかい。

その意味がトウカには少しよく分からなかった。まあ確かに、チエーンシリーズの防具なんて店で安く買えてしまう初心者用の防具といってもいい品。

自分にとっては、今までずっとチエーンシリーズを普段着のように愛用してたぐらいで他の街でのチエーンシリーズは毎回街を移り変わる時の一つの楽しみでもあった。

街によっては、同じ品でもやはりデザインが違うのがその理由だ。そんなチエーンシリーズだが、初心者が装備しているのが多い。

さいきんの初心者は、かなり若い人が増えて、トウカ自身が知っている中でも一番若いハンターは十四歳と最初聞いた時はビックリしたぐらいだ。

つまり、初心者＝年齢の低いとなりそうならば工房側も次第にサイズの小さいチエーンシリーズを生産する事になる。

自分一人で疑問を抱き、それを自分なりに考えては解析して自分勝手な答えを出して納得したような、他人から見ればどうでもいような事をするのがトウカの思考の半分以上を占めていたりする。

「はいよ、試着室はアツチだからね」

「ん？あ、はい……じゃあせつかくなんで使わせてもらいますね」

「おー、凄い。ピッタリです」

「当たり前じゃ」

「やっぱり御婆の眼は凄いですね」

「ほっほっほ。そうじゃろ？そうじゃろ？わしゃは、七十五年間とこの仕事をしてきての、今までお前さんのように」

「あー……」

しまった。

思った時には少し遅かった。

老人は褒めると何かいい事がたまにあったりする。トウカの経験上、こういった工房などの職人の腕の場合は品が安くなったりなどがあるが、こういった自分の経歴を長々と、それこそ数時間は自慢話になる事があったりもする訳で、こうなったらコチラからは止められない。

止めたら止めたで、どこかしょぼんとしたような顔をされてしまう為に少し悪い事をしたような気分になる。

「あんた、つりだ」

「あ、はい。ありがとうございます」

「それはコツチの台詞だ。まいどー」

今も目蓋を閉じて、記憶を辿り昔の事を思い返すようにして語る御婆の代わりに支払いを済ませてくれた、先程トウカが気になった奥で作業をしていた炭まみれの黒い肌をした女性だった。

自分よりも少し長いぐらいの藍鉄の髪をまとめてうなじの辺りで縛っていて、熱を持った紅く力強いその瞳には目が離せなくなるようなものがあった。

「にしても、アンタ……凄く綺麗だ……。なんでハンターなんかしてるのか気になるぐらいだよ」

工房で働く女性にとって、その言葉はごく自然に出てしまったようなものだった。

単純に、素直に彼女を見た第一印象をそのまま口にただけの事。なんの世辞でもなかった。

「あー、やっぱりそう思いますか？」

「やっぱり？」

「えと、自分で言うのもあれなんですけど……もう今まで結構な人に同じような事言われてるんですよ。アハハ………はあ………」

今まで結構な人に同じような事言われてる。

そんな事、自分のルックスにかなりの自身がないと言えることではない。だけれども、イザナは 工房で働く女性 遠目で仕事中に御婆のサイズチェックの際にチヨコチヨコと見ていたが、こっちはやって間近で見るとより一層に美人度（？）が増えて見える。

今も、後ろから野朗共のこの美人をチラチラと見てくる視線が背中越しに分かる。

イザナにとっては、トウ力を見ているとこんなむさ苦しい野朗達に囲まれてひたすらに汗を流しながら炭にまみれて仕事をする自分と、少し女として無意識に比較してしまうモノがある。

(この人……幾つなんだろう?)

なんて、知ったところでどうしたって自分がこの人に勝てる要素なんて何一つないのだから気にするだけ無駄というヤツだ。

アタシは、好きで今の……この工房で働いているのだから別にもう女なんて

「綺麗だなんだと言われても、正直自分にはよく分からないんです

よ。それに、綺麗だって言うならさつき働いていた時の貴方の方が自分にとってはとても綺麗で魅力的でした」

不意打ち過ぎた。

女性だとか、男性だとかそんな事は関係なしにただトクンと胸の内では何か鳴った。

これほどまでに可愛らしく、愛らしい笑顔で初めてそんな事を言われた。

イザナにとって、女はもう捨てたも当然だった。確かに、まだ二十歳になったばかりで女を完全に捨て切れてはいないにしても、その僅かな隙を見事に抉じ開けられた気がした。

とたんに、顔が仕事中でもないのに熱くなつた。俯いていた視線を顔が熱いままに彼女へと向けた。

「あつ！ やつぱり、綺麗じゃないですか。肌もこんなに透き通るくらい白いし」

満面の無邪気そうな笑みでそう言つては、自分の頬に付着していた炭を指で擦り落とす。

後ろで何人かの同僚が「ぐはっ」「うはっ」と、声を上げてノックアウトしたのが分かる。普通なら、これだから男共は と、呆れるところだが今回だけは同僚の気持ち少し分かる。

ただ綺麗と言つてくれるのとは少し……大分違つた。

あまり人の容姿など気にしたことのない自分が綺麗だと感じた女性に、自分が綺麗で……魅力的だと告げられたのだから 少し、ほんの少しでも女としての自分にまだ自身もてる。

「ちなみに、ハンター登録ってどこでやってるか分かりますか？」

「え……えと……そこを上がっていけば広場だから。そしたら、ギルドカウンターの所にマスターが」

「そっかありがとう！」

彼女は、チェーンシリーズのみを装備して広場へと続く石段を優雅にあがっていく。

イザナは、そんな彼女の後ろ姿を眺めながら右手で拳を握りしめては胸にあてる。

(少しは……歳相応の女の子っぽくしてみようかな……)

そう思った瞬間、彼女が「あつ！」と何かを思い出したかのような声をだしてはコチラへと振り返る。

そして一言衝撃の言葉を放った。

「ちなみに、ないとは思いますが一応誤解しないように言っておきますね。自分は『男』なのでその所よろしくお願いします！」

彼女の彼の放った言葉は、イザナの後ろで働く若い男達の心をズタズタに引き裂きイザナ自身にはチクリと刺さっていた乙女心を更に深く、グサリと突き刺す剣の言葉であった。

「あ、え……それじゃあ彼女　じゃなかった。彼の買っていったチェーンシリーズって、女性用の……」

まあ、いつか。

別段変ではないし、逆に似合っている。男性用のを装備した方が違和感が残るぐらいだろう。

トウカは、そんな事など知りもせず女性用のチェーンシリーズを装備して幾人ものハンター達が集った広場へと足を踏み入れている。

「お、おい見ろよ。あそこの新人、すげえーいい女じゃねえか」

「うお……やべえな」

「お、俺……ちょっと声かけて」

「やめとけて。あんな上玉、ぜってーお前なんか相手にしねーよ」
「いや。ダメでも行くぜ俺は。あんなの、話せただけでもなんか今日はいい事ありそうだからな」

そう言っつて、二人組みのハンターの一人は席を立ち、見つけたチ
ーンシリーズを纏った女性の下へと足早に向かっつていく。

それを観察する片割れは、ヤレヤレと絶対に相手にされないと結
論を出してただボケーっとチーンシリーズの彼女を見つめた。か
なりの美人だった。

相棒が、彼女に声をかけた。何か彼女が口を開いたと思ったら、
相棒が目を見開きつて啞然としたように口を開き、女性が通りすぎ
た後数秒後にガツクリと肩を落として帰つて来た。

「やっぱな。なんか言われてたっぽいが、なんだ。罵倒でもされて
きたか？」

はははと、一人笑う片割れをよそに相棒の方はグツタリとテーブ
ルに顔をつけて酷く落ち込んだ様子だ。

「おい、本当になんか酷い事言われてきたのか？」

「その方がまだマシだったかもなー」

「んあ？それはどういう」

「あいつ男だつてよ……」

「は？」

相棒は語った。ほんの数秒前の撃沈の話を。

「なあなあ、お嬢さん」

「自分は男ですので、お嬢さんは止めてください。からかってるんですか？」

「あ……え、いや……え？」

「?……それでは」

終了。

片割れは、再度カウンターにてギルドマスターと会話する彼を見つめた。

しかし今度はすぐに見つめ続けるのをやめた。

どつと何故か疲れた。何故かは分からない。ただ、何故か疲れた。そして、相棒と二人してテーブルにだらけた。

「ほえ？男かいな。ほえー」

あははと、今も自分をジロジロと眺めるギルドマスターに苦笑するトウカ。

やはりどうも自分が男だと驚かれるのには男として傷つくプライドってものがあって、慣れないものだ。

それはそうと、ハンター登録を終えたトウカは早速何か適当な採取クエストにでもと受付嬢に依頼を申し込もうとした。

採取クエストは、トウカ自身が新しい街に来た時には必ず受ける依頼であった。

理由として、一つは街から街への長旅の中で少し鈍った体の調整

と狩りの勘をしつかりと取り戻す事。

二つ目は、一番街に近い狩場や多く出かける事になる狩場の下見だ。大型モンスターとの戦闘では、力の弱い分、人は地の利も生かした知識も必要となってくる。

その為にはかなり重要な事だ。

地味であろうと、コツコツと。それがトウカの狩りのスタイルだった。

「と、確かあの受付嬢の人が下位クエストの　ん？」

やはり、受付嬢は看板娘のようなものでここにも数人居るが、どの娘も可愛らしい子ばかりだった。

その中でも、下位クエストを受け持つ受付嬢が一番年上のお姉さんらしさを感じさせていた。

しかし、どうも先客がいるようだ。

（男女二人のパーティーだろうか？）

またまたトウカの疑問癖のスキルが発動した。

（かなりの体格差があるパーティーだな）

そこでまた新たな疑問が浮かんだ。

少し様子を窺っていたトウカには、どうもあの男女のパーティーが内輪もめかなにかをしているように見えた。

男女間でのパーティーの間では珍しい事はない事はない。いくらパーティーとはいえ、やはり男と女だ。そりゃ……自分は経験した事ないが、そういった色々と事情であるだろう。例えば、浮気とか。が、あの二人のパーティーはどうも違った。

「あー、うつとおしい！」

なんと、あの優しいお姉さん系のように思えた受付嬢が突然怒りだした。一瞬そのギャップにトウカはビクツと跳ねるが、これ程なんとなく予想は出来た。

見ていると、あの女の子は男をどうも嫌がっているようだ。どうしようか？

出来れば早めに採取クエストへと出向きたい。うずうずとするハンター魂とでも呼ぶのだろうか？とにかく、それが狩りに行くに行けないこの気持ちによって高まってくる。

そんな事を考えていると、男が再び女の子に手を出そうとした。トウカは少し声をかけて、男の注意を逸らそうとして近づく。

「おっと、すまん」

「おわつとつとと……」

ドス。

ここは大人数のハンターが行きかう場所だ。少しぐらいぶつかり合う事はある。

トウカは、足をもつれさせては肩を意図的にぶつけるようにしたかのように少し強く男にぶつかってしまった。

それでも男は揺らぐことはない。

ギロリと鋭い眼差しが、自分へと注がれる。すぐに飛び退いた。そしてそのまま男の眼を見ずに頭を下げた。

「あ……えと、あの……すいません」

咄嗟にそんな言葉が出たが、内心心臓がバクバクと緊張させる。相手はかなりのハンターだ。防具を見ればなんとなく分かる。

そんなハンターを軽くとはいえどついでしてしまったのだ。もし相手

の機嫌を損ねたなら、この酔っ払い時テンションの上げ下げが激しい中、下手をすれば喧嘩沙汰になってしまいかもしれん。

トウカは、ゆっくりと。男の表情を窺うようにしてゆっくりと顔を上げた。

episode:1 (後書き)

はい。主人公は男の娘です。ですが、主人公に女装趣味などはありません(設定では)

えー、男の娘は設定であって、あくまでネタ的要素であります。本題のモンスターハンターの世界をしっかりと書いていきたいです。

それでもやっぱり、この作品の主な所は美人すぎる男の娘と……

誤字脱字、謎文法などはお見逃しください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6406v/>

彼女は彼で 男or女

2011年8月9日12時03分発行